ＲＳウイルス感染症

①ＲＳウイルスを原因とする感染症で、毎年、秋から冬にかけて流行します。２歳までにはほとんどすべての乳幼児がＲＳウイルスに感染するといわれており、いわゆる「かぜ」と同じ症状です。

②感染してから３～５日後に、初感染の乳幼児では上気道症状（鼻汁、咳）から始まり、その後下気道症状（ゼイゼイ、ヒューヒュー）が出現する。３８～３９℃の発熱が出現することがある。２５～４０％の乳幼児が気管支炎や肺炎になります。

③１歳未満、特に６か月未満の乳児、心肺に基礎疾患を有する小児、早産児が感染すると、呼吸困難などの重篤な呼吸器疾患を引き起こし、入院、呼吸管理が必要となる。

④乳児では、細気管支炎による喘息（呼気性喘息）か月が特徴的で、その後、多呼吸、陥没呼吸の症状や肺炎を認める。

⑤再感染の幼児の場合には、細気管支炎や肺炎などは減り、上気道炎が増える。中耳炎を合併することもある。

⑥特効薬はなく、治療はそれぞれの症状に対する対症療法が中心になります。

⑦終生免疫は獲得できないので、何歳でも何度でも感染するので予防を心がけましょう。

⑧予防のポイント
咳やくしゃみによる飛まつ感染や、子供同士の触れ合い等による接触感染でうつります。集団生活ではおもちゃやタオルの供用を避け、子供の年齢に応じて、咳エチケットを心がけましょう。家に帰ってきたら、手洗い・うがいを徹底しましょう。

⑨乳児期早期（生後数週間～数か月間）のお子さんがいらっしゃる場合には、感染を避けるための注意が必要です。上記症状のあるお子さんは、早めに小児科にご相談ください。